

令和 7 年 6 月 9 日現在

機関番号：23201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K10911

研究課題名（和文）父親の乳児に対する泣きの認知過程の解明

研究課題名（英文）Cognitive process of fathers' crying for their infants

研究代表者

村田 美代子（MURATA, MIYOKO）

富山県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：00627002

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：5～6ヶ月で第一子の乳児を持つ父親に子どもの泣きに対しての認知（解釈、思考、判断）過程と対応について振り返り、子どもの泣きに対する思いの変化を明らかにした。9名の父親に半構造化面接を行い、得られた内容を質的に分析した。父親は子どもの泣く理由を考え、宥め方を模索していたが、泣き止まない時期があると認知していた。しかし、3～4か月頃には泣きの解釈ができるようになり、5か月頃になると子どもが泣くことを受け入れていった。この過程においては、子どもの発達が経時的に関与しており、また妻との関係性が大きくそれに影響を及ぼしていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

父親は、母親と異なり妊娠という現象は体験できず、子どもの誕生と共に育児を担うことが求められる。そのため母親とは違った泣きの認知がありこのことが苛立ちにつながり、泣きに起因した虐待につながると考える。父親が乳児の泣きに対し何を感じ、考え、対応しているのかその認知過程を解明することで、泣きに起因する虐待の解決策を見出すことにつながると考える。また、父親が日常的な相互作用の中でわが子としての認識を促し育児支援に向けた一助となる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the cognitive processes (interpretation, thinking, and judgment) and responses of fathers with their first infant aged 5-6 months toward their child's crying, and clarified changes in their feelings toward the child. Semi-structured interviews were conducted with nine fathers, and the results were qualitatively analyzed over time. The findings revealed that fathers attempted to understand the reasons for their child's crying and sought ways to comfort them, but acknowledged that there were periods when the crying would not cease. However, by around 3-4 months, they were able to interpret the crying, and by around 5 months, they began to accept the child's crying. In this process, the child's development played a role over time, and the relationship with the wife significantly influenced this process.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：父親 乳児 泣きの認知過程 相互作用 育児支援

## 1. 研究開始当初の背景

父親の果たす役割は家庭の経済面を第一義的に担うことから、仕事を調整し妻の負担軽減を考慮して育児を実践することへ移行し<sup>1)</sup>、「養育する父親」としての役割<sup>2)</sup>に変化し、子どもの出生とともに母親と同様の子育ての担い手になることが、これまでよりも火急的に求められてきている。しかし日本の父親が育児に関わる時間は先進国と比べ最低の水準<sup>3)</sup>であり、母親に比べて乳児との相互作用を育む時間は圧倒的に少なく、父親を取り巻く社会の変化が追いついていない状況にある。そこでわが国では配偶者の出産直後の男性の休暇取得を促進し、男性の家事・育児への参画を促す取組が推進されている。このような中、育児では乳児の泣きに対する対応が課題となっており、父親においては「泣きやまないことに苛立って」実父が加害した事例が報告されている。

男性にとって父親になることは人生における大きなライフイベントであるが、今日では出生率の低下や核家族化が進み、父親は母親と同様に幼い子どもとの交流が希薄な環境で育っている。さらに初めての子どもを持つ父親は自身を通じた妊娠の知覚がなく、父親としての自覚が形成されにくい。そのためパートナーの身心の変化を介して自己の父親役割を適応させていくことが求められるが、その個人差は大きい。加えて、乳児は、生後約2週間から3~4か月まで泣きが増加し、特に生後1~2か月頃に泣きのピークがある。その時の泣きは何をやっても泣きやまないことがあり、対応に苦慮する<sup>4)</sup>。そのため、乳児の泣きへの対応は、泣きの特徴とその泣きが増加する期間があることを理解し対応することが重要である。母親は日常的な相互作用の中で泣く意味を理解し判断する経験を重ね、乳児の求める育児行動へと呼応している<sup>5)</sup>。しかし父親は、乳児の泣きの特徴に関する知識が乏しい点やその泣きの理解を判断する経験が少ないことより、乳児の泣きの意味を理解できず、苛立ちとなり衝動的な行動として虐待に走るものが推測される。

以上のことより、父親が、乳児の泣きをどのように捉え対応しているのかを明らかにすることが重要である。そこで、本研究においては、父親が子どもとの日常的相互作用を育むことにおいて、乳児の泣きに対する認知に焦点をあてその過程を明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究の目的

本研究は以下を目的とした。

- (1) 父親の乳児の泣きの捉え方を概念分析から明らかにする。
- (2) 乳児の泣きに直面した際の父親の感情、思考、行動にもとづく認知過程を明らかにすることを目的とする。

(1)(2)から父親が子どもとの日常的相互作用を育むことにおいて、乳児の泣きに対する認知過程を明らかにした。

## 3. 研究の方法

### (1) 父親の乳児の泣きの捉え方における概念分析

- ①文献検索：データ収集には4つのデータベース、PubMed、CINAL、CiNii、医学中央雑誌Webを使用し、検索用語は“father”, “infant” “crying”とした。
- ②分析方法：概念分析(Rodgersのアプローチ法)の手法を用いて分析した。
- ③倫理的配慮：出版倫理を遵守し分析を行った。

### (2) 父親のわが子の泣きにおける認知過程

- ①調査対象：5~6ヶ月の乳児を持つ父親を対象とした。
- ②分析方法：泣きに対しての認知(解釈、思考、判断)過程と対応について振り返り子どもに対する思いの変化について半構造化面接を行い、その結果を質的記述的にまた経時的に分析した。
- ③倫理的配慮：研究への参加は自由意思であり、参加の辞退およびインタビュー面談調査途中の参加の撤回における権利を有する旨を文書と口頭で説明した。また、本研究への参加に同意しない、あるいはインタビュー面談調査途中で参加を取りやめて撤回しても不利益を被らないこと、インタビュー調査終了1ヶ月以内であれば撤回は可能であることを口頭および文書にて説明した。

## 4. 研究成果

### (1) 父親の乳児の泣きの捉え方における概念分析

ハンドサーチによる2文献を含め33文献が分析対象となった。父親の乳児の泣きの認知過程として、7つの属性が抽出された。乳児が泣いていると父親は、【泣く理由を考える】、【慰めたいと思う】、【理由がわからず困惑する】、【自分の無力を感じ悲嘆する】、【児の泣きに苛立ちや嫌悪を感じる】、【泣きの対応の糸口を見つけ自分の子として認識する】、一方【糸口がわからず、自分の子として受け入れられない】と泣きに対する認知が移り変わるプロセスがあった。先行要

件は、【社会的因子】【パーソナリティ】【幼少期の被虐待の有無】【育児の知識や関与の状況】【乳児の泣き声の特徴】【パートナーの育児意識や関係性】の6カテゴリーであった。帰結は5カテゴリーを抽出した。父親が泣きの対応の糸口を見つけ自分の子として認識すると、【泣きに対する感情のコントロールができるようになる】【泣くことを受け入れる】、【父親としての役割肯定感の高まり】が促進していく。一方糸口がわからず、自分の子として受け入れられないと、【泣きに対してネガティブな感情が持続する】、【ネグレクト・虐待】につながることを示された(Fig1)。これらの結果から、父親の乳児の泣きにおける認知過程は「泣きの理由を考え慰めたいと認知するが、理由がわからず困惑し自分の無力を感じる。しかし悲嘆や苛立ちや嫌悪する中でも泣きの対応の糸口を見つけ自分の子として認識する。その一方、糸口がわからない場合は自分の子として受け入れられないでいる」と定義された。自分の子として認識していくには、泣きの対応の糸口を見つけることが重要である。

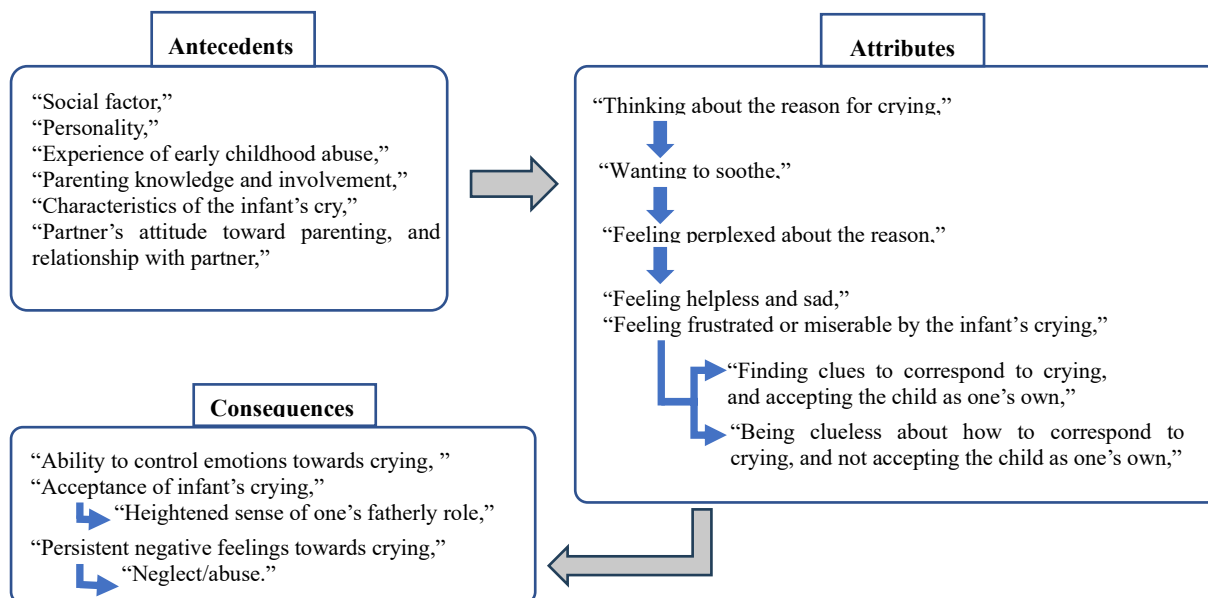


Fig1. Conceptual Diagram of the Father's Cognitive Process in Infant Crying

## (2) 父親のわが子の泣きにおける認知過程

9名の父親の研究参加を得た。平均年齢は30.6歳、インタビュー時の子どもの日齢平均は171.2日で、子どもとの生活を始めた時期は出産の退院後が5名、1か月健診後程が2名、2か月から2か月半が2名であった。8名の父親は育児休暇を取得しており、期間は1か月から1年であった。また取得開始時期は、出産時から5か月後とばらつきがあった。

父親のわが子の泣きに対する認知は、生活の中での触れ合いと子どもの成長とともに変化していった。その変化を支持する要因として妻との関係性が大きく影響していた。生後間もなく一緒に生活を始めた頃は、「どうしたのかな」「なぜ泣いているのだろう」「何とかしてあげたい」と子どもの泣きを【育児行動のきっかけ】としてとらえていた。その対応が「ミルク、オムツ、抱っこ」における【宥め方の模索】であった。しかし生後3週間から3か月の間にすべての父親が【宥めても泣き止まない時期を認知】しており、戸惑いや困惑、焦りの時期として変化していった。特に夜間の泣きと妻の体調不良、妻の機嫌にストレスを感じ「夜は眠い」「もう疲れた」「奥さんは切れた」「困り果てる」「途方に暮れる」と精魂尽き果てていた。また、「泣きは焦りにつながる」ことから、中には苛立ちや怒り、子どもをたたいたり投げ出したりしたくなる感情を自覚しており、自分を落ち着かせ「赤ちゃんは泣くもの」と自分を納得させていた。この泣き止まない時期には、「こういうのがずっと続くのかな」「明日終わってくれるのかっていうのがずっと続いていく」など【見通しが立たないことや抜け出せないで居ることの悲嘆】な状況にあった。

しかし3~4か月頃には泣きの対応の糸口として、【子どもが泣く原因やタイミングを妻と共有することや、妻の泣きに対する解釈を頼る】ことで、宥められる成功体験を重ね、子どもの反応から泣く理由を見極め解釈できるようになっていった。泣きの認知が【子どもからのサイン】ととらえ、「この泣きなら泣かせていても大丈夫」に変化していった。これは、日々の相互作用の積み重ねや、子どもの生活のリズムが整ってきたこと、妻からの感謝の言葉やねぎらいが肯定されたと感じ【自己の役割を果たしている実感】が持てたことによると考える。特に退院後早期に生活を共にし、また子どもの月齢が早い段階で育児休暇を取得した父親は、その変化を感じとっており、これは育児に向きあうことが保証された休暇の中で促進されていた。

父親が子どもとの日常的相互作用を育み、新しい家族の関係性を築いていくには、泣きやまない時期とされるパープルクライング(PURPLE Crying)の特徴とその対応や、揺さぶりなどのやっではないこと(Do not)を明確に父親に伝えていくことが重要である。特に子どもをたたいたり投げ出したりしたくなる感情を自覚していることから、どの父親においても虐待につながるリスクがあると考えられ、感情の落ち着かせ方も情報提供していく必要がある。父親は子どもの成長に伴って泣きの認知が変化することから妊娠中のパパママ教室などの出産前教育に加え、育児休暇取得前や子どもの発達に沿って伴走型支援の検討が必要である。また、父親の泣きの認知には妻と関係性が大きく影響していたことから、母親への身体回復支援の重要性やメンタルヘルスのサポート、育児力向上に向けた支援が継続して行われることが父親の支援にもつながると考えられる。

#### 〈引用文献〉

- 1) 岡田麻代, 西村香織, 村田美代子, 松井 弘美, 父親役割の概念分析, 母性衛生, 59(2), 2018, 398-405.
- 2) 寺見陽子, 南憲治, 松島京, 及川裕子, 寺村ゆかの, 伊藤篤, 父親の養育性・役割取得を促す教育プログラムのための観点導出, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 9(2), 2016, 1-22.
- 3) 平成 30 年版少子化社会対策白, 内閣府,  
[https://www.jinkennet.com/info/20180930\\_456.html](https://www.jinkennet.com/info/20180930_456.html) (閲覧日 2019, 9, 27)
- 4) Ronald G. Barr, The Period of PURPLE Crying program is an evidence-based shaken baby syndrome/abusive head trauma (SBS/AHT) prevention program available since 2007.
- 5) 堀井満恵, 笹野京子, 筏井沙織, 石井仁乃, 長谷川ともみ, 母親が児の泣き方を判別する能力獲得に關与する要因の検討, 富山医科薬科大学看護学会誌, 04(2), 2002, 33-42.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Murata Miyoko, Kudo Rika, Terai Takahiro, Matsui Hiromi
2. 発表標題 Paternal Cognitive Processes During Infant Crying
3. 学会等名 26th East Asia Forum of Nursing Scholars Secretariat 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 村田美代子、松井弘美、工藤里香、寺井孝弘
2. 発表標題 出生後早期に育児休業を取得した父親の子どもの泣きに対する認知過程とその対応
3. 学会等名 第45回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

富山県立大学看護学部看護学科ホームページ等
-----------------------

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	寺井 孝弘  (Takahiro Terai)  (20595326)	富山県立大学・看護学部・准教授    (23201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	工藤 里香  (Kudo Rika)  (80364032)	京都橋大学・看護学部・教授    (23201)	
研究分担者	松井 弘美  (Matsui Hiromi)  (70515725)	富山県立大学・看護学部・教授    (23201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関